

めざめる、ひらめく



草冠の学校

kusakanmuri school

kusakanmuriのレッススが

「草冠の学校」として生まれ変わります。

これまでの開催レッスンに加え、バラエティ豊かな講座をそろえた「草冠の学校」が6月からはじまりました。自分の中の「ひらめき」を互いに分かち合い、新しい感覚を呼び覚ましてみませんか。

「草冠の学校」 5つのエレメント

- 🌿 蒔く**
参加することはまさに種蒔き。その季節だからこそ育つ種を蒔きます。
- 🍎 実る**
ありのままの個性豊かな果実を実らせ、次に蒔く種につなげます。
- 🌱 芽吹く**
試行錯誤も楽しみのひとつ。ここからからだを耕し芽吹きを感じます。
- 🌸 咲く**
ひとりひとりが持っているひらめきを引き出し、花を咲かせます。
- 👫 行きかう**
参加した人同士の自然な交流で、新しい共感がうまれます。

レッスンの一部をご紹介します

ものを「つくる」だけに留まらない、ここからからだのバランスを整えてくれるような季節に寄り添うレッスンを展開します。

- ・「書」を通じて季節の言葉を味わう
- ・ラクガキから「描く」をはじめる
- ・紙と布と糸で一からノートづくり
- ・一週間はじまりに弾みを付ける月曜朝ヨガ etc...

国内各地や海外との
コラボレーションも!

レッスンのスケジュールや詳細はこちらからご覧ください。 → <http://school.kusakanmuri.com>

Flower

植物のいきいきとした生命力を感じられる夏のおすすめ商品と、草花をご紹介します。



**ネイティブフラワー
フレッシュリース**
多肉植物とエアープランツをポイントにあしらった、個性的なフレッシュリースです。強さと繊細さを併せ持つ、植物の魅力をお楽しみください。
6,000円



kusakanmuriのいちおし!

エアープランツ
葉や根から空気中のわずかな水分を吸収して成長します。根元のぽってりとしたふくらみがかわいらしく、横から見る姿が私のいちおしです。(吉田麗)

セダム

豪傑で知られる武蔵坊弁慶になぞらえた「ペンケイソウ」という別名があるほど、丈夫な植物です。暑い季節でも長く楽しめます。(中山千裕)

グリーンネックレス

コロコロした葉の中に水分をたっぷり含んでいます。流れるように垂らしたり、他の植物にかめると、動きのあるアレンジメントに。(中山優香)

※入荷状況によりご用意できない場合もございます

Books

人に「伝える」知恵を学べるおすすめの本をご紹介します。



「地域の魅力を伝えるデザイン」

地域の大切な物事を人々に伝え、未来へとつなげていくために制作された紙メディアの事例集。より深い目線で、それぞれの地域に根づく文化や、再発見された新しい魅力を感じる一冊です。
定価 1,500円(フィルムアート社)
坂本有理、佐藤李青、大内伸輔、芦部玲奈 編著

「アートプロジェクトのつくりかた」

全国各地で行われている、アートをきっかけとして地域を活性化させる取り組み。プロジェクトをつくる側の視点を紹介した、イベント運営の手がかりを学ぶことができる一冊です。
定価 3,900円(ビー・エヌ・エス新社)
齋藤あきこ 編集

夏のこころつなぎ

kusakanmuriのコンセプト「こころをつなぎ」をテーマに、季節の移り変わりを楽しむアイデアをご紹介します。



スペシャルな日の花冠
最近ファッションとして人気の花冠。パーティーや誕生日会などの特別な集まりで、頭に飾ってみませんか。自然と笑顔になり、幸せな気持ちになれるそうです。

illustration/ Yuka Hashimoto

amu

未来を編む kusakanmuriが店舗を構える建物、クリエイティブスペース「amu(アム)」のご紹介

編集とデザインの知恵が、あなたの思いをかたちにする

kusakanmuriも所属するAZグループがこれまで培ってきた「編集」や「デザイン」「情報設計」「アート」を、社会に幅広く活用していきたい…。そんな思いから、amuでは、さまざまな人や企業・団体とともに、訪れた人に新たな価値との出会いを提供できるよう、ワークショップやトークイベント、講演会、交流会、展示などを開催しています。ぜひご参加ください!



- 〈主な活動ジャンル〉
- ・デザイン
 - ・アート
 - ・ビジネス
 - ・テクノロジー
 - ・学び
 - ・企業・団体の活動支援



〈施設紹介〉
樹々に覆われるように建ち、大きなトップライトから差し込む光があふれるスペースは、建築家・原広司の設計です。

最新のイベント情報は
こちら

公式サイト <http://www.a-m-u.jp>
Facebook <http://www.facebook.com/amujp>
Twitter @amujp

コロリの 白花みずき!

夏の太陽にも負けない夾竹桃の花

街路樹にも流行があるらしく、20年ほど昔のスターだったハナミズキも最近では主役の座があやうい。同じく公園や広場の周りには必ず茂っていた夾竹桃も、いつのまにか姿を消した気がする。



海開きの頃になると夾竹桃の花が咲く
逗子小坪

夾竹桃は広島市の花としても有名だ。75年間草木も生えないといわれた焦土にいち早く咲いて、市民に希望と力を与えた。8月6日の平和記念日には欠かせない。我が国の高度成長期、公害にさらされた川崎コンビナートでも強靱な生命力を持つ夾竹桃は緑化樹木として重宝された。これほど逆境に強い植物ゆえか、花や葉、枝、根、全体に強い毒性があるので、取り扱いには注意!だ。

花の色は桃色が多いが、白やクリーム色もある。花言葉は「注意」「用心」「危険」などと物騒なのでプレゼントには無理かな。セミが鳴くかん照りの真夏、太陽と競うように咲き誇る姿は暑苦しくもあるが、平和を希求する戦士のように力強い。

文・写真/田中見二 通称コロリ。1947年長崎生まれ。教科書のデザインや女性誌「クロワッサン」のアートディレクションなどに関わる。



kusakanmuri

草冠通信
2015
Summer
vol.14



いのちの
つながる
想いの
樹、

フラワーショップ kusakanmuriより
夏の最新情報をお届けします。

※表記価格はすべて税別です
Cover Photo/ 水野聖二
Art Direction & Design/ Concent, Inc.

いのち 生命の樹、つながる想い

平和や勝利の象徴として知られるオリーブは、太古より人類に豊かな恵みを与えてきました。「生命の樹」とも呼ばれるオリーブを暮らしに活かす知恵は、現在まで受け継がれています。私たちの身近な存在であるオリーブに秘められた、多彩な魅力に触れてみましょう。

オスメは小豆島産の素材を使用したレモンオリーブオイル。スイーツにもよいですよ。



毎月1～15日はギャラリーショップでお客さまをお迎えし、16日～月末は制作作業に専念します。



の鳥色の糸を使った「オリーブ鳥手まり」は、わざわざ県外から買い求めに来る人もあるほど。島の仲間たちと一針一針、ていねいに手づくりしています。「オリーブ染めを通して、少しでも島を知ってもらえたらうれしいですね」。

木の生命を削り出していく

島の幹線道路から山道に入ると、木立の中に小さな小屋が見えてきました。小鳥の声とお気に入りの音楽をBGMにオリーブを削っているのは、天達慶隆さん(c)。山の仕事のかたわら、あたたかみのある木の小物をつくっています。「オリーブの剪定材が捨てられているのがもったいなくて。削って磨いてみると、すごく美しい木肌が出てきたんです」。天達さんの仕事に設計図はありません。木と語り合うように、あるがまま、感じるままに削っていく。「木にもそれぞれ個性があってね。そこにひと手間、生命を吹き込ませてもらう。だから、ひとつとして同じものはつくりません。ころんと丸みを帯びたスプーンに触れていると、やさしい気持ちになれるから不思議です」。

オリーブの魅力は木目の美しさ。模様に変化に富んでいて一本一本個性が違うからおもしろい。



島に根付いたオリーブに共鳴するように、それぞれのやり方で暮らす小豆島の人たち。地域や自然と共生していくためのヒントになりそうです。

より詳しいレポートを「草冠通信オンライン」に掲載予定です。どうぞ楽しみに！

取材協力／

● 小豆島ヘルシーランド株式会社(a)
tel/ 0879-62-7111
http://www.healthyolive.com/

● 山田オリーブ園(b)
tel/ 0879-82-5126
http://www.organic-olive.jp/

● i's Life (イズライフ)(c)
tel/ 0879-62-9377
http://islife-olive.com/

● オリーブ染め工房 木の花(d)
tel/ 0879-82-5991
http://www.olive-konohana.com/

● 小豆島自然工房56(e)
お問い合わせは取扱店「うみねこかじや」まで。
tel/ 0879-82-4838(金土日のみ/11:00～18:00)
http://neko3biki.exblog.jp/

日本のオリーブオイルだからこそ、普段使いを

オリーブを栽培するかたわら、オリーブソムリエとして活動する堤祐也さん。「オリーブオイルをもっと身近に使ってほしい」と、小豆島産はもちろん世界中のオリーブオイルを扱う専門ショップを島で営んでいます(c)。「海外のオイルと違って、小豆島のオイルはやさしくマイルドな味わいが特徴。洋食だけでなく、肉じゃがや魚の塩焼きなど家庭料理にもよく合いますよ」。オリーブオイルの使い方をお客さんに教わることも多いという堤さん。「例えば、そうめんのつゆに足してみたり。じつは醤油ととっても相性がよいんです。オリーブの楽しみ方はアイデア次第。もっともっと伝えていきたいですね」。

美しい島色にオリーブで染める

オリーブ色といえば、どんな色を思い浮かべますか？小豆島出身の染織家、高木加奈子さんが島のオリーブで染める「オリーブ染め」はじつに多彩です(d)。オリーブの若葉のような薄い薄緑色から、やわらかな日だまりの黄色、明るい島の夕焼け色…。しかも、それぞれの色には、「鳥日和」「春音」「鳥の空」など素敵な名前が付いています。「ひとつひとつ島の風景を想い描きながら染めるんですよ」と高木さん。こ

Report

木から葉、実に至るまで、あますことなく私たちに恵みを与えてくれるオリーブ。日本有数の生産地として知られる香川県の小豆島では、島の人々はどんな想いを抱きながらオリーブとともに暮らしを営んでいるのでしょうか。個性豊かな3人のプロフェッショナルたちと、オリーブを活かして作品をつくる2人の作家を訪ねました。

瀬戸内海に浮かぶ小豆島を歩くと、至るところでシルバーグリーンに輝くオリーブ畑を見かけます。この島にオリーブがもたらされたのは今から100年ほど前。三重県、香川県(小豆島)、鹿児島県で試験栽培したところ、瀬戸内海の温暖な気候に恵まれた小豆島でのみ栽培に成功。以来、日本有数のオリーブ生産地として知られています。

人間の都合じゃなくて、木のために何が出来るか

「農園で何をすべきかは、木が教えてくれるんですよ」と話すのは、小豆島ヘルシーランドで働く内海淳彦さん(a)。島内有数の広さを誇る約2,400本のオリーブ畑を管理するオリーブの達人です。「例えば、傷んだ葉っぱは黄色く落葉して、いち早く役目を終えるんです。ちゃんとほかの枝に栄養を渡してね。そして土に落ちた葉はやがて分解されて肥やしになる。木にとって無駄なことはひとつありません。土と日当たりと水、すべてのバランスの中

で木は育ちますから。人間の都合じゃなくて、木のために何が出来るか。それが僕たちの仕事です」。

自然を知るには、徹底的に向き合うこと

有機栽培でオリーブを育てる山田典章さんの畑は、ほかの畑と少し違います。ふかふかの下草がまるで緑のじゅうたんのような(b)。「普通は虫が集まるから草を生やさないけど、うちは逆に芝を生やすことでほかの雑草を防ぎ、天敵に害虫を食べてもらうんですよ」。それでも防げないのが、オリーブを根ごと枯らしてしまうオリーブアナアキゾウムシ。そこで山田さんはゾウムシを毎年200匹飼っては、徹底的に生態を観察しました。「ゾウムシが動き出す時間帯や湿度など、生態を知れば防ぐ方法もわかるから」。徹底的に自然と向き合うことで、不可能といわれた有機栽培を叶えた山田さんの畑は、オリーブ栽培で日本初の有機JASに認定されました。

アナアキゾウムシは根元に卵を生むので、毎朝チェック。休憩タイムは農園の特等席で。

